

家族や遺族への悲嘆カウンセリングが柱の一つであり、ボランティアの活躍が期待される。福知山線の脱線事故に言及して、JR西日本の幹部にも必要、との指摘は目から鱗でした。

竹内

緩和ケアのお話、身の引き締まる思いで聴きました。身近に「こういうことを考える」仲間がいて心強いです。人間らしい終末を合言葉に前向きに明るく考えていけることを望んでいます。

大久保

西村先生は「かたつむり」のような歩みを自分たちのせいのように言われるが、先生たち現場の皆さんの頑張りようを考えると、「かたつむり」の歩みにしているのは、周囲の社会のせいであることは明らか。でも、自分に何ができるのだろうか？

長坂

みんなの声

私が「余命」を宣告された時、①告知をしてもらう。延命治療はしない、②生前葬を執り行いたい、③家族だけに看取られてこの世の別れとする、と家族に言っています。

阿部

認知症が進行中で言葉もろくにしゃべれなくなった父に対して、何も“Doing”できないで、ただ傍にいてやる“Being”だけの下関市への帰省でした。先生のお話は、体の隅々まで浸み渡りました。

蔵永

終末期の患者に、昨日と同量の注射をしても苦痛を除去できないとき、これ以上薬の液量を増やしたら逝ったきりになると予想される場面で、医師としての決断はどうすべきか。お尋ねしてみたいと思いました。

加藤